

『ICU教育研究 視聴覚教育研究集録』1954年12月(国際基督教大学)

## 視聴覚教材利用の根本問題

国立教育研究所 矢口 新

最近視聴覚教育ということがやかましく言われる。そしてこの方面の教育運動に熱心な人も多いようである。併しその割合に学習の現場にこの教育即ち視聴覚教材の利用ということが考えられないのはどういふことであろうか。視聴覚教育を熱心に主張し、その運動を行っている人の中にもこれを学習の問題として考えていない人も居るようである。こういうと妙な言い方のように聞こえるであろうが、ただ映画をみせたり、幻灯をみせたり、放送を聞かせたりすればそれが視聴覚教育だと考えている人も多いのである。そういう人は今迄の教育の外側に新しくそういう映画、放送をみせる教育を付け加えることだと考えているのである。そういう考え方で主張をすればする程、逆に人々からうるさがられ白眼視されることもあるのである。何故なら、今当面している学習の問題は様々あって、その究明や実践が重要であって、それ以上によけいなことに手を出す暇はないと考えられてしまうのである。

これは視聴覚教育というものを、今の教育が当面している学習問題の中に位置づけることが出来ない所から来ているのである。

これは視聴覚教育を主張する人々が、映画や放送の愛好家であり、そのファンであって、そちらの例から提唱するけれども、学習の当面している問題についてよく理解せず、そういう学習の問題のどこに位置し、またそれとどういう関連に於て視聴覚教材の利用が考えられねばならぬかということについて明白な主張をすることが出来ない所から来ているということも考えられるのである。

視聴覚教材の利用を実現するという事は、大きくいえば我が国の学習体制の根本に対して大きな変化をもたらすことなのである。というのは、我が国では学習については、一般的に言って、抽象的観念を与えることだというように考えられている。否、観念が現実に対してどういう結びつきをもっているかということの問題にしない所の全くの抽象的観念的学習が行われているのである。そうしてこれが、小、中、高等学校、大学と進むに従って益々ひどくなっていると言うことが出来よう。特に高等教育に於ける文科系統の学習は全くの観念主義なのである。学習の能率をあげるとは、この抽象観念を如何に多く与えるかという問題であり、観念を具体化するために、視聴覚教材を与えれば、能率が下ると考え勝ちなのである。それより一歩進んだとしても、視聴覚教材を利用すれば、その観念を把持するに効果がある、即ち記憶に対して効果があると考える位が関の山であって、それは一歩ひるがえって成程役には立つが、それは各個人の努力でおぎなうことが出来るから、すべての観念にそういう具体的なものをもって来ることは全体としては能率が悪いから、まず二の次にするということになるのである。

こういう考え方が一般であるから、そこへただ映画や放送やその他の道具をもって来て、その効果を説いてもなかなか理解されるに至らないのである。

学習というものがただ実体のない空虚な観念の授受と考えられている限り、そこへ何をもって来よ

う

とそれは余けいなものか、或は好ましいけれども必要かくべからざるものではないと考えられるのである。ただこのような状況に於ても、映画や放送がその強烈な感覚的印象をもつ所から、何となく一部の人々にあこがれをもたせて、教育の中にとり入れられているということは言える。

併しもっと手近な所で日常茶飯のことを具体的に、現実的に学習させるということが行われねばならぬ筈であるのに、そういう点に関しては、映画や放送をとり入れる教師でさえもが盲目なのである。こういう点が現在の視聴覚教育のもつ現実の矛盾なのである。例えば、理科に於て、実験とか観察とかは自然を究明する上に必要かくべからざるものであり、自然の学習とは、自然そのものを探求することである筈なのに、自然を相手にしないで観察せず、実験しない学習が行われているのである。或は実験観察しても、それはただ形ばかりであるという場合があるのである。これは自然の中へ入って行くという所に自然学習の根本があることが真に理解されていないからである。また形式的に実験、観察を主張する人は、映画や幻灯で見てしまうことは不可であると論ずる人もいるが、これもまた誤った考え方である。自然に迫る方法としては様々な手段が使われてよいのであって、自然そのものは決して一篇の映画、幻灯で究明されつくしてしまうものではなく、映画幻灯で見た上に、更に自然そのものに迫る実験観察が成立つ筈である。所がそう考えないで、映画幻灯は実験観察をさせないで、自然を説くから本当のものでないと考えるのは、自然が無限に追究すべき対象であることを忘れて、自然について或るきまった観念を教えるのが理科教育であると考え、それを与えるために実験、観察が必要であると考えているからなのである。日本の実験、観察はその意味で形式的にしか考えられて居らず、自然研究としてでなく、観念教育の手段としての位置におかれていると言うべきであろう。学習のリアリズムが成立していないと言わなくてはならぬ。

これは、標本の利用、模型の使用などについても同様である。現在の自然学習では、標本や模型が、自然研究の方法として使用されてはいないで、概念の説明の道具となっているのである。ただ言葉で説明するより、多少強い印象を与えておくといった程度でしか考えられていないのである。

社会現実の具体をみるということもまた重要な学習である。社会科は、社会に関する抽象観念を与える教科でなく、社会現実を観察して、そこから真実を把握して来るのである。所が社会現実をみるということは極めて困難なことである。例えば、新聞が社会に如何なる機能を果しているかということを見るのは極めてむづかしいことである。長い時間、広い空間に亘っての現象であって、手近な自然の観察の様にはゆかないのである。それにはどうしても、映画の如きものを利用しなければならない。所が、新聞の学習には、新聞社の見学がきまりきって行われるが、それは単なる建築物や、機械の動きを見ることにとどまっている。これは社会の現実としての新聞の機能をみることには余り関係はない。大新聞社をみれば、その機構の大きさ、新聞製作の規模の大きさについての印象をうることになるが、それは、新聞が大きな意義をもつであろうということを想像させる程度の役割りしか果たさぬであろう。所がそういう反省と自覚がなくして、新聞の学習は、新聞社の見学と結びつくのである。ここには、見るということが如何なる意味をもつかについての基本的な理解がかけているのである。

こういう学習の現実、徒らに形式的な見学を流行させ、次にはそれに飽いて、今度は観念的な学習に逆行するという風潮をつくっている。見る対象から何を見とって来るかという反省のない、目的のない見学などというものは、学習の中に位置づかないのである。そういう見学が多いということは、

我が国の学習に於けるリアリズムが貧困であるということで、見るものがただ印象を受けとるという素朴な段階でしか考えられていないことを示すものである。

絵画、写真などというものは、最も手近なもので、使い方によってはリアルな自然や社会を、それ自体よりも一層明確に見せうるものである。またそれを数枚、数十枚連関して構造的に見せることも出来るのである。それは見るものが、見ることを明確に自覚していることによって、自在に自分の世界像をつくってみることが出来る。その点教材としては実物よりもすぐれた価値をもつ場合があるのである。現実はいかに複雑であって、自己の見ようとするものを抽出して見ることが出来ない場合があるが、写真は現実から一応はなれて一定の抽象された立場で見方をはっきりして見ることが出来るから、よりはっきりと自己の見ることに注目することが出来るのである。

所がそれらを素朴な模写として考えないで、漠然とした印象を与えるものとしてしか考えない所にこれらを学習に利用する考え方が起って来ないのである。これは、自然や社会のリアルなものに迫るといふことが、本当に考えられていないからである。真にリアルなものに迫るとは、あくまで視点を明確にして、見るもの即ち対象の中から見ることを引き出すことなのであるが、見るということそのように考えない所に問題があるのである。見るということ素朴な印象の受容としてしか考えていない所に問題があるのである。「見れども見えず」とはこういうことを言うのであろう。それでは視聴覚教材の利用ということは考えられて来ないのである。表やグラフの如きものになると一層、視点がはっきりして、その点から対象の一面を抽出してはっきりと見ることを表現してあるのである。社会をあらわした統計表やグラフなどは社会の現実を把握するになくてはならぬものである。それによってわれわれは頭の中に社会像をつくるのである。さきに例にあげた新聞の機能の学習などは、統計表や、グラフの方が、象徴的ではあるが而もより現実の構造をはっきりその構造にしたがってみせることが出来る場合があるのである。こういうものを使用して、真にリアルなものに迫ろうとする学習は現在殆んど行われていないといってよい。ただグラフを書いたり、見たりしていることは多く見られるが、それらが、リアルなものの表現として使われているのではなく、むしろ断片的な数字の記憶などのためにつかわれていることが多いのである。

技能的なものの実習などに於ても見ることは重要な意義をもっていて、実習は、まず模範とするものを見る、特に分析的に見ることからはじまり、その模倣、自己の技能の反省ということのくりかえしによって行われなければならぬが、ここでも見せることが一向真剣に考えられていない。模範的なものを見せる段階も極めて素朴にしか行われておらず、また自分を反省的に見るということは殆んど行われていない。写真もあるし、また言語や音楽の技能の学習の場合などは、テープレコーダー等によって、自分自身を見ることが出来る筈であるが、そういう考え方では全然使用されて居らないといつてよい。

要するにリアルなものに迫ることによって、人間を形成して行くという考え方がなく、すべてが観念的に考えられているのである。こういう所では、視聴覚教材の利用といつても、形式的、表面的にしか考えられない。たとえそのような教具を使用してもただ形式的に新しい道具が入っただけであつて、古い観念によって使用しているにすぎないのである。

この古い学習観念を打破することは、非常にむづかしいことであるが、先ず重要なことは、教員養成の場が、古い観念をすてることが第一ではなからうか。それが原動力となつて、社会のすべてに浸透している古い学習観とそれに基づいて出来ている観念学習の体制をうち破るべきではないだろうか。